

# 確かな学力の育成と評価の在り方

## — 「CAN-DO」リストの形での学習到達目標設定と評価 (2) —

山岡 大基 深澤 清治 檜葉みつ子 青木基容子  
石原 義文 井長 洋 五井 千穂 小橋 雅彦  
瀬戸口茂久 西中村貴幸 八島 等 山田佳代子

### 1. 本研究の背景

外国語教育, こと英語教育に対しては, 実際的なコミュニケーション・ツールとして使える運用力の育成が強く要請されている。それは, 観点別評価の導入や学習指導要領の改訂といった学校の教育課程そのものに関わる施策にとどまらない。たとえば, 次のように官民を問わずさまざまな施策や提言が立て続けに発表され, 実用的な英語力の育成が強力に推進されようとしている。

- ・『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』<sup>1)</sup> (文部科学省): 「このようなコミュニケーション能力を育成するためには, 講義形式の授業から, 例えば, スピーチ, プレゼンテーション, ディベート, ディスカッションなどを取り入れることにより, 生徒の言語活動を中心とした授業へと改善を図る必要がある。」
- ・『実用的な英語力を問う大学入試の実現を』<sup>2)</sup> (経済同友会): 大学入試へのTOEFL導入により「初等中等教育改革で進める4技能バランスよく総合的・統一的に指導する学習に接続し, 学校も教員も生徒も受験のための学習から実用的な英語力の養成に積極的にシフトすることができる(ママ)。」
- ・『世界を舞台に活躍できる人づくりのために』<sup>3)</sup> (日本経済団体連合会): 「初等中等教育段階から, 実践的な英語教育を拡充し, 児童・生徒の英語によるコミュニケーション能力を大幅に強化することが急務である。」
- ・『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』<sup>4)</sup> (文部科学省):  
小学校中学年「コミュニケーション能力の素地を養う」

小学校高学年「初歩的な英語の運用能力を養う」  
中学校「身近な話題についての理解や簡単な情報交換, 表現ができる能力を養う」  
高等学校「幅広い話題について抽象的な内容を理解できる, 英語話者とある程度流暢にやりとりができる能力を養う」

学校においてそのような英語教育を進めていくにあたっては, まず指導局面において生徒に実際に英語を運用させる言語活動を取り入れた授業を充実させることと, 評価場面でその指導の成果を適切に測り, 次の指導を計画していくことが必要である。

そのような, 指導と評価を一体的に実施するために, 文部科学省は『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』を公表し, 学習指導要領・観点別評価に基づいた指導と評価のあり方を具体的に示している。

### 2. 本研究の課題設定

上述のような時代的要請に応えるべく, 附属小・中・高等学校英語科(以下「附属」)では, 2013年度に, 「Fuzoku CAN-DO」という枠組みの作成に取り組んだ。「Fuzoku-CAN-DO」とは, 学習到達目標とその評価方法を, 学習指導要領および「CEFR-J」(東京外国語大学投野由紀夫研究室, 2012)<sup>5)</sup>を参照しながら一体的に記述した指導と評価の枠組みのことである。具体的には, 小学校1年生から高等学校3年生までの12年間を見通した学習到達目標を, 附属独自の「CAN-DOリスト」として体系化し, また, その学習到達目標の達成度を把握するためのパフォーマンス・テストも「CAN-DOテストパック」(中・高のみ)として, 「CAN-DOリスト」と連動させて体系化した。

Taiki Yamaoka, Seiji Fukazawa, Mitsuko Kashiba, Kiyoko Aoki, Yoshifumi Ishihara, Hiroshi Ichō, Chiho Goi, Masahiko Kobashi, Shigehisa Setoguchi, Takayuki Nishinakamura, Hitoshi Yashima, and Kayoko Yamada: On the enhancement and assessment of academic ability and skills in English in elementary, junior high, and senior high school — Goal setting and assessments for learning English from the viewpoint of “CAN-DO” statements (2) —

この「Fuzoku CAN-DO」の枠組みについては、2013年度中に試験的に運用し、いくつかの学年で、実際に指導と評価を実施した。なお、これら「CAN-DOリスト」および「CAN-DOテストパック」の作成と試験運用の詳細については、2013年度の広島大学学部・附属学校共同研究の成果として小橋ほか（2014）<sup>6</sup>にまとめたとおりである。

以上の研究成果を踏まえ、2014年度は「CAN-DOリスト」および「CAN-DOテストパック」を各学年で本格的に運用し、生徒の実際的な英語運用力の向上を図るとともに、暫定的な面も残るこれらの枠組み自体を建設的に修正し、より効果的な指導と評価が実施できるものへと整備することを目的として研究を進めた。

ただし、上述の「CAN-DOリスト」や「CAN-DOテストパック」は、あくまで概括的なものであり、それを当該年度の状況とすり合わせ、教材や評価材へと具体化する作業には時間がかかる。また、まだ運用の初期段階であるので、大学教員からの助言を受けて、指導・評価の計画を修正する必要もあった。したがって、本格運用とはいっても、すべての項目を一斉に運用し始めることは現実的に無理があったので、本年度に関しては「着手できるところから着手する」という方針で行った。

各学年で実際に行った指導と評価の具体は、次節にまとめるとおりである。評価については、評価の規準と基準を統一した評価機会を複数回設け、それらを総合してCAN-DOリストに設定した目標に到達しているか否かを見取った。ただし、紙幅の都合上、次項に示す評価材は、複数ある評価機会のうちの1回で使用したものを例として示す。なお、本稿執筆時点で評価未実施のものについては、評価結果を記述していない。

### 3. 指導と評価の事例

#### 3.1. 小学校（3・4年生）

評価の観点：外国語表現の能力

評価する技能：話すこと

Fuzoku Can-Doにおける位置づけ：

(A) 学習指導要領：外国語活動は第5・6学年が対象なので該当なし。本校の指導要領では以下の通り。

・やさしい英語の質問・依頼・指示を聞いて、簡単な言葉や動作で応じること。

(B) CEFR-J：【A 1.1】

・なじみのある定型表現を使って、時間・日にち・場所について質問したり、質問に答えたりすることができる。

・家族、日課、趣味などの個人的なトピックについて、（必ずしも正確ではないが）なじみのある表現や基礎的な文を使って、質問したり、質問に答えたりすることができる。

(C) テスト問題：自作の既習の表現を用いた質問

評価材の例：

- ①What day is it today?
  - ②What's the date today?
  - ③How's the weather today?
  - ④When is Christmas [Tanabata; your birthday]?
  - ⑤Where are you from?（4年生のみ）
  - ⑥Where do you live?（4年生のみ）
  - ⑦Do you have a brother [sister; pet]?
  - ⑧How do you come to school?
  - ⑨What are you doing now?
  - ⑩How was your summer vacation?
- \*以上の中から7題質問し、さらに、発音・アティチュードも評価する。

評価機会：インタビューテスト（前期末）

評価規準：

なじみのある定型表現についての知識を活用して正しく口頭で発表することができる。

評価基準：

各質問において次の観点と基準によって採点した。

<内容>

「素早く、スムーズに正しく答えた」：3点

「言い淀みがありながらも正しく答えた」：2点

「不正解ながら答えようとした」：1点

「何も答えなかった」「パスと言った」：0点

<発音>

「英語らしくはっきりと発音した」：2点

「カタカナっぽい発音をした」：1点

<アティチュード>

「アイコンタクトが取れ、笑顔である」：3点

「下を向きがちだが、一生懸命答えようとしている」：2点

「興味・関心が不足しており、コミュニケーションを図ろうとする態度が見られない」1点

以上、合計26点の得点のうち、次の基準によって評価を決定した。

十分満足できる：21点（8割）以上

おおむね満足できる：16点（6割）以上

努力を要する：16点（6割）未満

評価にいたる指導の概要：

曜日や月、天気など、前年度に導入済みの項目は、復習と英語の授業の雰囲気作りを兼ねて、トピックに関連する歌を歌わせて楽しく確認させた。新出事項に関しては、まず、質問の答えとなる型を教えて、何度も口頭練習をさせた。小学3・4年生なので、口頭での練習を基本とした。例えば、(I come) by bus. / I live in Midori. を何度も言わせた（カッコ内の表現は4年生用）。次に、パワーポイントでbusやtrain, streetcarなど交通機関を表す英語を写真と文字の両方で導入し、何度も口頭練習をさせた。その後で、質問の型を教えて、答えの時と同様に何度も言わせた。

以上のような言語材料の提示及びその定着を図る活動の後で、ペアで学習した言語材料を使って質疑応答をさせて、更なる定着を図った。その上で、コミュニケーション能力の育成のために、“Survey”という、児童全員が教室を歩き回り、一人でも多くの児童に質問をして情報を得る活動を行った。その際に、以下のようなやりとりをするように指示をした。

通学に使用する交通機関を尋ねる例

A: Good morning, Akira-kun.

B: Good morning, Akiko-san.

A: How do you come to school?

B: (I come) by streetcar.

A: Thank you very much.

B: You're welcome.

以上の言語活動により定着を図った質問項目のいくつかを、授業開始時の挨拶の後で、毎回、児童全員に尋ねて答えさせ、さらに、4人一組で質疑応答をさせることで、質問と応答がスムーズにできるようになることを目指した。

指導と評価の結果および考察：

指導時にはほぼすべての児童が言語活動を適切に行うことができた。しかし、評価問題に対しては困難を覚えた児童が各学年とも数名おり、次のような評価結果となった（それぞれの評価の児童の割合）。

十分満足できる：3年：25.8% 4年：33.3%

おおむね満足できる：3年：51.6% 4年：51.3%

努力を要する：3年：22.6% 4年：15.4%

定着のための指導時間が短かった質問項目(⑨・⑩)の正答率が低く、指導の時間と工夫の必要性を感じた。

### 3.2. 中学校

#### 3.2.1. 中学1年生

評価の観点：外国語表現の能力

評価する技能：話すこと

Fuzoku Can-Doにおける位置づけ：

(A) 学習指導要領：話すこと（イ）

・自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。

(B) CEFR-J：【A 1. 1】

・家族、日課、趣味などの個人的なトピックについて、（必ずしも正確ではないが）なじみのある表現や基礎的な文を使って、質問したり、質問に答えたりすることができる。

(C) テストパック：Classroom Speaking

評価材の例：

What's your name? / What do you usually do on Sunday? / Where are you from? / Where do you live? / When is your birthday? / Do you have any brothers or sisters [any pets]? / How many brothers [sisters] do you have? / What subject do you like? / What is your favorite food? などの構文・表現を用いた質問に英語で答える。また最後に、インタビュアーに1つ質問をする。インタビュー時間は4分間とする。

評価機会：インタビューテスト（2学期半ば）

評価規準：

インタビュアーの質問に対して、正しく応答できる。

評価基準：

十分満足できる：ほぼ全ての質問に対し、自然な間で適切に応答することができる。結果として、時間内にインタビュアーと十数回以上のやりとりをしている。

おおむね満足できる：質問を理解できない場合などに沈黙になる時間はあるが、言い換えの表現やヒントが示されれば応答することができる。時間内にインタビュアーと10回程度はやりとりが成立している。

努力を要する：理解できない質問が多く、沈黙が多い。時間内にインタビュアーとの間で成立するやりとりが数回程度にとどまる。

評価にいたる指導の概要：

それまでに教科書や副教材（『基礎英語』）で学習した表現のうち、さまざまな疑問文を文法的に系統立てて提示し、使用場面に結びつけて理解し応答する練習をさせた。特に限定した時期に集中して行うのではなく、1学期から授業の中で継続的に機会を設けてきた。教師からの指示に沿って、クイックレスポンスを促したり、ペアでチャットをさせて、その場面に即した質問をする力を高めるよう促したりした。

インタビューテストは、ネイティブ教師により1名あたり4分間で実施した。中学校1年生は、2学期の半ばから週1時間、ネイティブ教師の授業が始まる。このテストは、その授業に先立ちネイティブ教師が生徒の英語力を把握する機会ともなる。

インタビューテストへ向けて、生徒への直接的な指示は次のとおりである。テストの2週間ほど前に次のような告知をすることで、どのような質問をされるかは各自で考えさせるようにした。

次の視点から各先生が質問されますので、備えておいてください。

「S先生とD先生（ネイティブ教師）は、皆さんを教えることを楽しみにしており、皆さんのことをいろいろと知りたがっていらっしやいます。」

指導と評価の結果および考察：

通常の授業においては、慣れた学習環境で比較的自由に発話している生徒がほとんどであるが、1人ずつのインタビューテストで、しかも初対面のネイティブ教師がインタビュアーという条件下においては、普段よりも話すのが難しいと感じた生徒が少なくはなかったようだ。インタビュアーであるネイティブ教師による評価は次の通りであった。

十分満足できる：49%

おおむね満足できる：38%

努力を要する：13%

ネイティブ教師には、既習の言語材料を予め伝えておき、特に文法・構文的には配慮した質問をしてもらうようにした。1年生の半ばの時期ということで、既習の疑問文の形は限られており、文法的要素が理解に困難をきたす要因とはなっていないと考えられる。しかし語彙においては、既習のものが限られている状況下、インタビュー内では日常生活では頻繁に使用されるが未習（あるいは基礎英語で数回扱われた程度）の語彙も扱われ、語彙力が乏しい生徒が応答に窮する傾向にあった。ヒントを与えられてもそこから未知語の意味を推測する力も乏しいものと考えられる。

### 3.2.2. 中学2年生

評価の観点：外国語表現の能力

評価する技能：書くこと

Fuzoku Can-Doにおける位置づけ：

(A) 学習指導要領：話すこと（イ）

・自分の考えや気持ち、事実などを聞き手に正しく伝えること。

・与えられたテーマについて簡単なスピーチをすること。

(B) CEFR-J：【A 2. 1】

・写真や絵、地図などの視覚的補助を利用しながら、一連の簡単な句や文を使って身近なトピックについて短い話をするができる。また簡単な意見交換をすることができる。

(C) テストパック：Conventional Speaking

評価材の例：

中学2年生は3月の修学旅行で長崎を訪れます。あなたの班の長崎市内自主研修のプランを、訪れる場所とその理由とともにクラスメイトに簡単にわかりやすく説明しなさい。

評価機会：クラス・学年発表会（3学期末）

評価基準：次の4つの観点から評価する。

①英文の構成

②英文の内容

③発表の仕方

④英語らしい発音や抑揚

また、発表はグループとして総合的に評価する。

十分満足できる：

①発表文が導入部⇒本論⇒結論といった英文らしい構成でまとめられている。

②訪れる場所とその理由が簡単にわかりやすく、正確な英語で説明できている。

③ジェスチャーやアイコンタクト等を効果的に用いて、自分の言葉でメッセージを伝えている。

④正確な発音やアクセントが身についている。

おおむね満足できる：

①英文の構成にやや不備はあるが、本論を中心に展開されている。

②訪れる場所とその理由がわかりやすく説明できている。英文にやや誤りは見られるが、伝達に支障をきたすほどではない。

③やや不自然さはあるが、ジェスチャーやアイコ

ンタクト等を用いてメッセージを伝えている。

- ④発音やアクセント等にやや誤りが見られるが、英語らしく話そうとしている。

努力を要する：

- ①内容が論理的にまとめられておらず、英文の構成として大きな不備が見られる。
- ②訪れる場所とその理由は述べられているが、英語が伝達に支障をきたすほど不正確である。
- ③原稿をほぼ棒読みである。
- ④発音やアクセントが不正確で、伝達に支障をきたしている。

評価にいたる指導の概要：

導入として、ONE WORLD English Course2（教育出版）Lesson 8 “Aya’s Reports about Australia”を用いた。この課はAyaが冬休みに訪れたオーストラリアでの経験をクラスで紹介するという内容を扱っている。聞き手にしっかりとメッセージを伝えるための練習として、内容・音声の2つの側面に焦点をあてたい。内容面としては、本文理解をさらに発展させるため、追加情報を盛り込み、より完成度の高いレポートをまとめる活動を行う。音声面では絵やキーワードを用いて完成したレポートを再生させたり、レポートの内容を会話仕立てに再構成させ、会話練習を行う。

あわせて、冬休みの課題として、修学旅行の班別自主研修のプランの原案を考えさせている。3学期には授業の中で、Lesson 8の内容をもとにしながら、各班の原稿をより完成度の高いものに仕上げる予定である。また、発表形式は自由としている（例：レポート形式、会話形式）。

授業ではその他の課も扱う予定である。発表を意識させ発音やアクセント、またジェスチャーやアイコンタクト、自然な英語表現なども意識させたい。

指導と評価の結果および考察：

指導時にはLesson 8の内容、また発展的な言語活動を適切に行うことで、自分たちの研修内容を聞き手にしっかり伝える活動へと発展させたい。

評価は教員が各評価基準に従って行う。ただし、生徒にも聞き手として簡略化した評価基準を用いて他の班を評価させる。評価の視点を持つことで、聞き手にメッセージを効果的に伝えるために必要な様々な要素を、意識させることができ、発表時に応用して使うことができる可能性があるからである。

### 3.2.3. 中学3年生

評価の観点：外国語表現の能力

評価する技能：話すこと

Fuzoku Can-Doにおける位置づけ：

(A) 学習指導要領：話すこと（エ）

・つなぎ言葉を用いるなどのいろいろな工夫をして話を続けること。

(B) CEFR-J：【A 2. 2】

・簡単な英語で、意見や気持ちをやりとりしたり、賛成や反対などの自分の意見を伝えたり、物や人を比べたりすることが出来る。

(C) テストパック：Personal Spoken Conversation

評価材の例：

目標：中身の濃い90秒チャットを楽しもう！  
テーマ「私が大好きな場所」  
テーマについて、パートナーと90秒間英語で会話しなさい。ヒントボックスにある表現を参考にして良い。  
ヒントボックス：  
表現のヒント：  
▶I have been to ○○ twice. I really like the place because ~  
▶I have never been to ○○, but I really want to go there.  
▶Have you been to ○○?  
以下略

評価機会：授業内 3学期

評価規準：

つなぎ表現や質問をするなど工夫をして、90秒間まとまった会話を続けることができる。

評価基準：

十分満足できる：平易なわかりやすい英語でvoice inflectionの工夫をしながら、情報を付け加えたり相手の話に関連した質問をしたりして90秒間会話を続けることができている。

おおむね満足できる：平易な英語で情報を付け加えたり相手の話に関連した質問をしたりして90秒間会話を続けることができている。誤りがあっても理解に支障をきたすほどではない。

努力を要する：沈黙が続く、同じことを繰り返すなど90秒間会話が続かない。相手の発話に関連した発話をするできている。

評価にいたる指導の概要：

まず、右に示すような、会話を続けるためのストラテジーと基本的な表現を提示し、全体で口頭練習を行った。その後、2学期の間にペアによるチャット練習を約5回実施した。

会話を続けるヒント

その1. 相づちで「愛」を返そう！

その2. 聞き取れないときには黙っていないでこう言おう！

その3. 言葉が出てこないときはこう言って間を持たせよう！

その4. わかったかどうか自信がないときには確認しよう！

その5. Plus one piece of information / Plus one questionを入れて話題を膨らませよう！

(注：具体的な表現は略)

チャット練習では、毎回振り返りシートを用いて、ストラテジーに関する振り返りをさせた。また、言いたかったが言えなかったことを記入させて、必要に応じて語彙や表現の指導も行った。ペアは座席に応じて決定した。テーマによって比較表現、理由の言い方、現在完了など注目すべき言語材料を提示したが、それらの言語材料を必ず用いることが今回の目的ではないので、参考程度とした。

このような練習を通じて、これらのストラテジーを理解し適切に使用する力をつけさせることを意図した。

指導と評価の結果および考察：

指導時にはほぼすべての生徒が指導内容を理解し、ある程度のストラテジーも適切に行うことができた。しかし予備評価として1クラスを対象にチャットテストを実施したところ、相づちやつなぎ表現はほぼできているものの、「相手の言ったことを確認する」などのストラテジーはあまり使われておらず、“Sorry?”や“Could you say it again?”など、相手に発話内容の繰り返しを求めるにとどまっている生徒がほとんどであった。またどちらが話すかを考えているような間があり、その結果時間が不足してしまったペアも見られた。

以上のことから、生徒の多くが妥当な評価を得られる段階にまで達しておらず、指導ならびに練習を継続する必要があると言える。したがって、評価活動は、予定していた2学期末ではなく、turn takingのストラテジーも含めて再確認・練習した後、3学期に実施することとした。

### 3.3. 高等学校

#### 3.3.1. 高校1年生

評価の観点：外国語表現の能力

評価する技能：話すこと（やりとり）

Fuzoku Can-Doにおける位置づけ：

(A) 学習指導要領：【英語表現 I】

・与えられた話題について、即興で事実や意見感情などを伝えることができる。

(B) CEFR-J：【A 2. 2】

・簡単な英語で、意見や気持ちをやりとりしたり、賛成や反対などの自分の意見を伝えたり、物や人を較べたりすることができる。

(C) テストパック：Spontaneous Speech (Personal Talk)

評価材の例：以下の指示が書かれた用紙を生徒に黙読させ、教師が下に示したSituation 1～6の状況から3つ選び、即興的な申し出を生徒に求める。

I am a hotel guest. You are a hotel desk clerk at the hotel reception. I have lost my voice, but I have some urgent problems. I communicate my requests to you without speaking or writing. Your job is to work out what the guest needs and to offer a solution on the spot.

Situation 1 : I am thirsty. I need something to drink.

Situation 2 : I have a headache. I need some medicine.

Situation 3 : I am hungry. I would like to eat some sandwiches in my room.

Situation 4 : I have lost my door key. I have been locked out.

Situation 5 : I am hot. My hotel room is very stuffy. I cannot open the window.

Situation 6 : I have a high fever. I need a doctor right away.

評価機会：インタビューテスト（3学期）

評価規準：

相手の置かれた状況や要求を理解し、その場で適切に申し出をすることができる。

評価基準：

十分満足できる：与えられた3つの状況のうち、3つとも適切に申し出をすることができており、用

いられた表現も正確である。

おおむね満足できる：与えられた3つの状況のうち、2つ以上適切に申し出をすることができている。用いられた表現に誤りがあっても伝達に支障をきたすほどではない。

努力を要する：与えられた3つの状況に対して、1つしか、あるいは全く申し出をすることができていない。また、申し出の際に用いられた表現は、伝達に支障をきたすほど不正確である。

評価にいたる指導の概要：

中学校学習指導要領<sup>7)</sup>では「言語の働きの例」のうち「考えや意図を伝える」(申し出る)の表現として、

例1 “Shall I take you to the station?”

—— “Yes, please. I’d like to catch the 9 o’clock train.”

例2 “Would you like me to help you?”

—— “Oh, please. These books are too heavy for me to carry.”

例3 “Can I help you?”

—— “Thank you. Where is Takamatsu Station?”

などが示されている。

これらは、比較的短いやりとりの中で考えや意図を伝えることを目標としており、高等学校においては、このことに加えて「適切な表現」を選択しながら、まとまりのある考えや意図が伝えられるよう指導することが求められている。したがって、「英語表現Ⅰ」においてto不定詞や法助動詞を学習した後に、それらを活用した言語活動を行う際には、適切な表現を選択しながら申し出を行うことができるように、「言語使用域」を強調した指導を計画した。

具体的には、以下のような例を示して、場面に応じて適切な表現を選択するformalityを強調した練習を行い、後日ロール・プレイによる評価機会を設けた。

- (a) **Would you like** some coffee?
- (b) **Would you like** some help?
- (c) **Would you like** to sit down?
- (d) **Would you like** to use the bathroom?
- (e) **Would you like me to** open the window?
- (f) **Would you like me to** take your coat?  
(used with close friends and family)
- (g) Do you want some coffee?
- (h) (Do you) want me to open the window?  
(Wisniewska et al. (2006) <sup>8)</sup> の質問文を使用)

formalityに関する認知度が低い場合、「意味」の伝

達はおおよそ可能ではあるが、伝えようとする「意図」が誤解されてしまう可能性がある。したがって、評価問題においては、ホテルのフロント係と宿泊客という場面を設定し、受験者にformalityを意識させる出題とした。

また、評価場面で評価者と受験者が言語による意味の交渉を行わないことを前提にしたのは、相手の要求を推測する段階から、正しく適切な表現を用いた申し出を解決策として示すことまでが、「申し出」という言語の機能に含まれると考えられるからである。

### 3.3.2. 高校2年生

評価の観点：外国語表現の能力

評価する技能：書くこと

Fuzoku Can-Doにおける位置づけ：

(A) 学習指導要領：英語表現Ⅱ、2(2)イ

・論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連、表現の工夫などを考えながら書くこと。

(B) CEFR-J 【B 1. 1】

・自分に直接関わりのある環境(学校、職場、地域など)での出来事を、身近な状況で使われる語彙・文法を用いて、ある程度まとまりのあるかたちで、描写することができる。

・身近な状況で使われる語彙・文法を用いれば、筋道を立てて、作業の手順などを示す説明文を書くことができる。

【コミュニケーション英語Ⅱ】

・論理の一貫性、段落のつながりなどに注目して、まとまりのある文章を書くことができる。

【英語表現Ⅱ】

・ペアやグループで文章を読み合い、改善点を指摘し合うことで、自分で文章を推敲することができる。  
・読み手の立場に立ち、文章の構成や表現などを考えながら書くことができる。

(C) テストパック：Academic Writing (single paragraph)

評価材の例：

もし、あなたが自宅から電車で片道2時間の距離にある大学に通うことになったとしたら、あなたは自宅から通学しますか、それともアパートなどを借りて一人暮らしをしますか。いくつかの例を挙げ50語程度のパラグラフを書きなさい。

評価機会：実力テスト（3学期中）

評価規準：

基礎的な文法力、ライティング力を発展させ、英文論理構成の基礎や展開方法を理解し、それを元に論理的で説得力のあるパラグラフを書くことができる。

評価基準：

十分満足できる：立場を明確にして（序論）、妥当な理由をあげること（本論）ができており、論理的な帰結（結論）で構成され、さらに正確な英語で表現できている。

おおむね満足できる：序論、本論が概ね論理的に構成されている。英語表現に不正確さがあるが、伝達に支障をきたすほどではない。

努力を要する：本論と序論がうまくつながっていない。英語が伝達に支障をきたすほど不正確である。

指導過程

アカデミックライティングは、（1）論理的なパラグラフを書くこと（2）プレゼンテーションを行うことの二つが目的となっている。

1. パラグラフ構成について学習する（書式・句読法・主題文・支持文・結語文）
2. 論理展開パターンを学ぶ（cause-effect, time order, contrast 等）
3. モデルパラグラフを用いて、効果的な構成方法を学ぶ。
4. 学校関係の話題について各自がdraft を2回提出することを原則とする。  
テーマ「あなたが校長なら何をしますか」  
「小学校での英語教育について賛成ですか反対ですか」
5. プレゼンテーションを行う。読むだけでは、聞く側は理解が十分でないことも考えられるので、キーワードを記したものを等visual aidを準備させる。
6. 聞く側は、評価シートを用いて発表を評価する。
7. 教員は、パラグラフの一貫性という観点から評価を行う。

指導と評価の結果および考察：

パラグラフ構成については、1年生時よりReadingの授業でも指導を重ねてきているため、知識としてはほぼすべての生徒が指導内容を理解することができた。しかし、実際にパラグラフを自分で書く段階にな

ると、説明不足であったり、結論に一足跳びに達するなど論理的に書くことに困難を覚えた生徒が多かった。言い換えればstatementとwarrantが一致しない面が多々見られた。様々な英文に接し、機会あるごとに論理的な流れを意識させると共に、発想の訓練の必要性もあると思われる。

### 3.3.3. 高校3年生（旧課程履修）

評価の観点：外国語表現の能力

評価する技能：書くこと

Fuzoku Can-Doにおける位置づけ：

(A) 学習指導要領：

【コミュニケーション英語Ⅲ】

・論理の一貫性、段落のつながりなどに注目して、複数の段落からなる、まとまりのある文章を書くことができる。

【英語表現Ⅱ】

・内容を読み返したり、他の意見を参考にしたりして、自分で文章を推敲することができる。  
・論点や根拠などを明確にするとともに、文章の構成や図表との関連、表現の工夫などを考えながら書くことができる。

(B) CEFR-J：【B 1. 2】

・新聞記事や映画などについて、専門的でない語彙や複雑でない文法構造を用いて、自分の意見も含めて、あらすじをまとめたり、基本的な内容を報告したりすることができる。  
・物語の順序に従って、旅行記や自分史、身近なエピソードなどの物語文を、いくつかのパラグラフで書くことができる。また、近況を詳しく伝える個人的な手紙を書くことができる。

(C) テストパック：Academic Writing (Multiparagraph)

評価材の例：

“When studying for a big test, do you think it is better to study by yourself or together with a group?”

この問いに答える①～③の文章を読み、それぞれの文脈に沿うように空所に適切な英文を補いなさい。

① [ (注：becauseを含む文とすること) ]  
Every person has their own strengths and weaknesses, so they can focus on their weaknesses by studying by themselves. Besides, in the actual test, they have to answer all by themselves.



② Studying together with a group is better because you can keep your motivation for studying more easily. Before you take a big test, you have to study for many months. During such a long period, you will have a lot of difficulties, and you may lose your motivation.  
[ ]

③ In some cases, studying by yourself is better, and in others, working with others is better. It depends on the situation, If you want to make the situation of learning close to that of the actual examination, you should study by yourself.  
[ ]

評価機会：定期考査

評価規準：

- ①について：与えられている2つの理由を統合・抽象化した内容をbecause以下に述べるができる。
- ②について：Studying with a groupの利点を、第1文と第2・3文を結びつけて述べるができる。
- ③について：Working with othersを支持・詳述する内容を述べるができる。

評価基準：

- 十分満足できる：3つの規準を全て満たし、ほぼ正確な英語で表現できている。誤りがあっても伝達に支障をきたすほどではない。
- おおむね満足できる：3つ規準のうち2つを満たし、それぞれほぼ正確な英語で表現できている。誤りがあっても伝達に支障をきたすほどではない。
- 努力を要する：3つの規準のうち、1つしか満たしていない、または全て満たすことができない。あるいは説明の英語が伝達に支障をきたすほど不正確である。

評価にいたる指導の概要：

以下のような英作文課題を与え、主題文、支持文、結論文を備えた論証文を書く練習をさせた。

英作文課題例①

「大都市で暮らすより小さな町で暮らすほうがより快適だ」という意見に対するあなたの意見を50語前後の英語で述べなさい。 [滋賀大]

英作文課題例②

次の質問に50語程度の英語で答えなさい。

With so much news available on the Internet we no longer need newspapers. Do you agree? [宮城教育大 改]

これらの課題に取り組ませる際、支持文が妥当か、論理の逸脱がないか等、文章の論理性についても考えさせた。

指導と評価の結果および考察：

指導時にはほぼすべての生徒が指導内容を理解していたが、評価問題に対しては困難を覚えた生徒が多く、「十分満足できる」段階に達していたのは、全体の約5%程度であった。特に規準①の「統合・抽象化」とう課題で多くの生徒が躓いており、この部分の指導が一層必要であると思われる。

#### 4. 成果と課題

2. で述べたように、以上の取り組みは包括的なものではない。Fuzoku CAN-DOが完全に運用できたときにどのような成果や課題が表れるかは未知数である。しかし、少なくとも小学校から高等学校までの全学校種・学年において具体的な実践を試みたことで、部分的にはあるが、この枠組みが実際の運用に耐えるものであることが証明されたといえる。

また、個々の教員においても、新たな枠組みの中での指導と評価を実際に計画・実行していくことにより、実際の英語運用力を到達目標とした授業づくりについて留意すべき点を、新たに見出したり再確認したりすることができた。

残された課題としては、本年度実践にいたらなかった部分にまで実践を拡充していくことが、まず必要である。

また、本研究では考察の対象としなかったが、このような実践を体系的に行っていくことによる、生徒への動機付けも明らかにすべき点である。実際的な運用を意識した言語活動といっても一概に論ずることはできず、生徒がより学習に動機付けられるような活動を整備・開発していくことが重要である。

さらに言えば、学校における評価はあくまでも指導に生かされてこそ意義のあるものであるから、単にFuzoku CAN-DOを実施して終わりにするのではなく、評価により得られた情報を、再度指導へと還流させるサイクルも確立せねばならないだろう。

いずれにせよ、目の前の生徒への指導に注力するの

と同時に、より長期的な視点に立ち、附属としての体系的な指導のあり方を模索し確立させていくことが、引き続き必要である。

#### 引用文献

- 1) 文部科学省 (2011) 『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』.
- 2) 経済同友会 (2013) 『実用的な英語力を問う大学入試の実現を』
- 3) 日本経済団体連合会 (2013) 『世界を舞台に活躍できる人づくりのために』.
- 4) 文部科学省 (2013) 『グローバル化に対応した英語教育改革実施計画』
- 5) 東京外国語大学投野由紀夫研究室 (2012) 『CEFR-J Version 1.0』
- 6) 小橋雅彦・深澤清治・檜葉みつ子・石原義文・井長洋・小銭恭子・五井千穂・瀬戸口茂久・山岡大基・山田佳代子 (2014) 「確かな学力の育成と評価の在り方—「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定と評価—」『広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要』第42号, pp.119–127.
- 7) 文部科学省 (2008) 『中学校学習指導要領解説 外国語編』 開隆堂
- 8) Wisniewska, I., Riggenbach, H., & Samuda, V. (2006). *Grammar Dimensions 2. 4th Edition*. Heinle.